
オカケン!!

トニー伊藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オカケン！！

【Nコード】

N2389N

【作者名】

トニー伊藤

【あらすじ】

オカルト研究部。都市伝説やホラー、超常現象からゴシップまでなんでもござれ。今日も今日とて活動しています。そこに怪しげな情報があれば、汗を垂らして追求します。お困りな事があれば、いつでもいらしてください。〃〃〃オカルト研究部と銘打ってますが、ホラー的な要素はほぼありません。要するに、幽霊にかこつけて女の子といちゃつくお話です〃〃〃

落ち武者（１）（前書き）

むらむらしてやった。

後悔はしてないけど、反省もしてないけど、罵詈雑言は受け付けません。

落ち武者（１）

幽霊に名前を与えてはならない。

言葉は力を持つ。

不確かな存在が名前を持てば、それは確かに“そこ”に存在する事になる。

人々の意識下、またはあくまで噂であるはずの存在が形を持ってしまふ。

噂の出所が何処にあるか、それが本当なのか嘘なのか。
それらを一切合財無視をして、この世に居つくきっかけを持ってしまふ。

故に幽霊に名前を与えてはならない。

もし、幽霊に名前を与えた者がいれば

その人物の結末は、皆の想像に任せる事にする。

落ち武者（2）

「落ち武者？」

今日も今日とて、我らオカルト研究部はオカルトな事柄に関する情報を吟味している。

陽の当らぬ薄暗い部室を宛がわれ、そこでひっそりと活動をしてるのである。

そもそもオカルト研究部自体が学校に認められている訳ではない。

表向きは文芸部と偽っている。

しかし、実体は都市伝説や巷に蔓延るホラーな噂、果ては校内のゴシップまでに精通する。

授業も終わり、放課後となった今。

俺は落ち武者なる噂を聞かされていた。

「そうです落ち武者です落ち武者ですよ、先輩！」

「落ち着けよ」

落ち武者の情報を仕入れてきたのは、今年唯一の部員。

二年は俺とライオン丸宗谷 紅緒の二人だけ。

三年は部長だけ。

唯一の一年は目の前でやたらと興奮している女子だけである。

実は規定の五人に部員が達していないため、部を維持できないはずなのだが、そこは我らがオカルト研究部。

先生方のゴシップや、生徒会長の不祥事までを網羅している、いつ導火線に火が付くかわからない爆弾みたいな存在である。

俺は与り知らぬが、恐らくは部長が何かしらの手回しをして、部を存続させているのだろっ。

「でもでもっ、落ち武者ですよ！ 現代に落ち武者！ このミスマツチに興奮しない方がおかしいですよ！」

ふんふんと鼻息荒く俺に詰め寄る馬鹿な一年を若干鬱陶しく感じた。

「うるさいな。落ち武者落ち武者喚いてないで、ちゃんと説明しろよ、ロリ子」

「なっ…！ 私はロリ子じゃありません！ ちゃんとした名前が」

「身長140センチもないような奴がロリロリしてないでても？」

ロリ子は本当に高校生なのだろうか、と疑問に思わざるを得ないくらい背が小さい。

それに加えて、子供っぽくて、馬鹿っぽい。

具体的に言うと、小学生が好んで食べていそうなお菓子を落としてマジ泣きする様な奴である。

「あります！ 140センチ弱あります！」

「それは139センチって意味だろ」

俺と並んで立つと、まず間違いなく兄妹に間違われる。

と言うより、間違われた事がある。

入学して一ヶ月くらいの時、ロリ子とオカルトな情報を仕入れに行った時の事である。

あの時、俺は初めて幽霊なるものを見たのだが、それはまた別のお話。

「むー！先輩がロリ子って呼ぶから、他の人にもそう呼ばれるんですよ！どうするんですか！」

「知らない。いいから、落ち武者の話をしるよ」

未だぶんすかしているロリ子だが、落ち武者の話をしたかったのか、割と素直に落ち武者の噂について話し始めた。

町の外れに、もうぼろぼろになった武家屋敷が存在する。

当然、そこには誰かが住んでいる訳ではないのだが、うちの高校の生徒がそこで人影らしきものを見たらしい。

そこで、若さゆえの行動力とでも言うべきなのだろうか、そいつはその武家屋敷で肝試しをしてみようぜ、と友達に言ったらしい。

友達も面白がってその言葉に同意し、後日、夜の10時くらいにその武家屋敷に集まったとの事。

初めは、皆が皆、幽霊がいるとは思ってもみなかったし、そもそも幽霊自体を信じていなかった。

わいわいとその武家屋敷を散策していた。

しかし、ある一室を前にした時、明らかに空気が違って、まさしく、“幽霊が出る感じ”みたいなものを感じたらしい。

しかし、そこは男子高校生。

無論、女子も誘っての肝試し。たかが空気が変わったくらいでビビるなんてカッコ悪い。

一人の男子が幽霊なんている訳がないと自身を奮い立たせ、内心はどう思っていたか知らないが、その部屋の障子を開け放った。

そこで見たものは

特に何もなかったらしい。

拍子抜けしたそいつはくるりと後ろを振り返って、笑った。

何だよ、何もいねえよ、と。

しかし、どうもおかしい。

障子を開けた奴は残ったメンバーを見ているのだが、彼等はそいつを見ておらず、そいつの後ろ、つまり部屋の中を凝視している。

しかも、その顔が恐怖に引き攣っている。

そいつは、まさか、と思いながら、ゆっくりと後ろを振り返る。

そこには

「何と落ち武者がいたんですよ！」

「へー」

ありがちな怪談じゃないか。然して珍しい話でもない。

曰くがありそうな廃墟に行ったらお化けに会いました、と一言で片づけられる。

「先輩はなんでそんなに興味がなさそうなんですか！ 落ち武者で

すよ！？」

だから何と言ってやりたいが、こいつはあまりに冷たくすると泣いてしまう恐れがある。

泣かした事はまだないが、いつか必ず泣かせてしまいそうだ。

「落ち武者といってもね…興味をそそられないな」

「先輩は落ち武者じゃなくても興味をそそらないじゃないですかっ」

まあ、そうなんだけど。

「お化けに興味がなければ、何でオカ研に入っただんですか？」

「いや、文芸部だと思ってたからさあ」

文芸部との名称を持つオカルト研究部だが、その実態は全校生徒に知られている。

だが、俺は知らなかった。

とりあえず、落ち着いてのんびりできそうな文芸部の部室にいったら、今の部長に捕まえられてしまい、ずるずるとオカルト研究部員として活動している。

「部長が強引なんだよね。辞めようとしたら脅してくるし」

全校生徒どころか、教師、はたまた教育委員会の秘密すら握っていると噂される部長に、当然の如く俺の秘密は知られてしまっている。

そんな大した事でもないが、部長は尾ひれを付けてバラすと脅してくる。

部長の言った事ならば、例え嘘でも真実として皆に知られる事になる。

「う、確かに部長は怖い人ですよね……得体が知れないって感じですよ」

部長の話題が出た途端、ロリ子は唯でさえ小さい体を縮こませる。

「今の発言は部長に報告しとくから」

「えっ？ や、やめてください！ そんなことしたらいじめられちゃいます！」

「いじめられちゃえよ」

「嫌です！ 先輩は何だかんだで部長に気に入られてるからいいですけど！ 私は違います！」

「その割には雑用とか頼んでくるよな」

「それは先輩と一緒にいたいからですよ！ 部長は不器用なんです！」

「へー、ロリ子も部長の事よくわかってるじゃん。あの人、本当に不器用だよな。ろくに資料の整理も出来ないし」

と言うより、整理する必要があるという感じが？

手に入れた情報は大体が頭の中にインプットされるとか何とか言っ
てたし。

そう言う訳で、部室の掃除とか資料の整理は俺とライオン丸宗谷と
ロリ子の三人でやっている。

部長には座ってもらっている。

下手に動いてもらつと、汚す可能性があるからだ。

「いや、でも、ロリ子も部長に気に入られてると思うよ。あの人、
興味がなかったら無視するし」

「え…そうなんですか？」

「そうそう。ロリ子が好きだからいじめたくなるんじゃない？ 小学
生の男子みたいだな」

「そ、そうなんですか……部長が、私を……」

ぶつぶつ言ってるロリ子の顔が赤くなっているのは、この際、気に
しない事にする。

翌日。授業が終わった放課後。

ロリ子の落ち武者の情報を聞いて、俺とロリ子はその落ち武者を見たという生徒達に話を聞きに行く事にした。

何故、ロリ子が落ち武者の情報を手に入れたかと言うと、それはその生徒達が1年生だからである。

ロリ子は廊下で話しているのを耳に挟んだが直接そいつらに聞かず、俺を通してから聞きに行く事にしてみたんだ。

「その時に聞けばよかったじゃん」

「知らない人と上手に話せません」

「コミュニケーション能力がない奴だな。社会不適合者め」

1年の廊下を2年が練り歩くのは気まずい。

自意識過剰と思うかもしれないが、何か見られている様な気がするのだ。

「そいつらの顔、覚えてんの？」

「はい。……あ、いましたよ」

ロリ子が指先が差した方向を見れば、そこには茶髪のチャラチャラした感じの男子生徒数人が話をしている。

……確かに、アレはロリ子じゃ話しかけにくいだろっな。

「ちょっといいかな」

ま、そこは上級生の威厳とやらを使って話しかける。

昔から幽霊より怖いものは人間と決まっているが、俺は人間より虫の方が怖い。

「何だよ」

茶髪君に話しかけたら、むっとした感じで返された。

向こうはこちらが上級生と気付いているはずなのに、この態度。

親の教育を疑うね。

「噂で聞いたんだけど、君達？ 君？ どっちでもいいか。落ち武者を見たんだって？」

落ち武者、という単語を聞いて、茶髪君が息を飲む、なんて事はなく、へらへらした態度に変わった。

「あー、その話？ そうだよ。あの街外れの家で落ち武者見たぜ」

ふむ、他の生徒達には反応が見られないが、茶髪君は見たと言っている。

ならば、このまま話を聞いてもいいだろう。

「そうなんだ。じゃあ、その時の話を聞かせてくれる？」

「いいけどよ……あんた誰？」

「あ、俺？ 俺は才力研の」

「才力研！？」

あら、何か酷く驚いている様な。

「す、すみませんでした。生意気な態度、取っちゃって……」

オカルト研究部の名前を出しただけでこの効果。

牛耳ってるんじゃないのか、この学校を。

どれだけ恐れられてるんだよ、オカルト研究部。

「いや、いいよ。で、話を聞かせてくれる？」

「あ、は、はい」

…いくらなんでもビビり過ぎでは？

「大体のあらましは知ってるからさ。落ち武者を見た時の事を教えてよ」

「いや、俺も詳しくは覚えてないんすけど……」

と、前置きして茶髪君は落ち武者を見た時の事を話し始めた。

「うーん……大した情報は集まらなかったな」

茶髪君の他にも、その武家屋敷に肝試しに行った生徒達から話を聞いたが、誰もが似たような事を話していた。

「皆さん、落ち武者の容姿をよく覚えてないって言っていましたからね」

ロリ子の言う通り、皆、落ち武者を見た認識しているが、その落ち武者の特徴は覚えていないと言っていた。

まあ、恐怖にかられて特徴を捉えるより速く、逃げ出してしまったのだろうが。

とにかくぱつと見て、鎧みたいなのを着込み、刀っぱいものを持っていたとしかわからなかったとの事。

「どうしようかな、部長に報告しとこうか……」

あの人は自分の元に情報が集まらない事を嫌がるからな。

伝えておかないと後々嫌味を言われそうだ。

「でも、こんな中途半端な情報も部長は嫌がるじゃないですか」

そうなのだ。

我らがオカルト研究部の部長は、情報を集める事を生きがいとしているが、それが中途半端だったり、ガセネタだったりするのは嫌がるのだ。

曰く、正確かつ早急に。

功速を尊ぶ人なのである。

「それよりライオン丸宗谷先輩はどうしたんですか？ 今日的事、伝えたんですよね」

「…あ、忘れてた」

そうだった。

ライオン丸宗谷がいないなとは思っていたが、あいつは昨日、部活を休んだんだ。

俺が伝えないと落ち武者の話すら知らないだろう。

「えー！ どうするんですか、先輩。ライオン丸宗谷先輩、絶対帰ってますよ！」

昨日と言うより、何かしらの事件性が感じられる出来事が起きないと、あいつは部活を休み続ける。

今回は俺の落ち度で、あいつを部活に参加させる事が出来なかった。

「すまん。こうなりやアレだ。アレするしかない」

「アレですか？ 本当にアレするんですか？ でも、アレするなら部長に知らせないと」

「いいよ。俺が言つとく。部長の嫌味は俺が甘んじて受ける」

「そんなの悪いですよ。私が持ち込んだ話ですし…」

「気にすんな。一応、先輩だからな」

こういう殊勝な所はロリ子の唯一の美点でもある。

普段がうるさいから霞むけど。

「じゃあ、時間は後でメールするから。また後でな」

落ち武者（3）

何故、自分の前に現れたのか。

何故、あんなにも楽しそうなのか。

自分は楽しくなかったというのに。

当たり前の事が出来なくて、いつもいつも与えられた役割をこなす事しか出来なかった。

それに不満を持った覚えはない。

仕方がないと諦めていた。

しかし、しかしだ。

自分が死ぬ時、どう思った？

本当にこのまま死んでもいいと思ったのか？

そんな事はない。

当たり前の幸せを享受できなくて、そして殺され、死んでいく。

そんなのは認めたくなかった。

だから、未練がましくもこの場所に残っている。

別に、自分が珍しくて見に来るのなら構わない。

だが、あれ程楽しそうな姿を見せつけられると、羨ましくなってしまう。

自分の望みは唯一つ。

それは

初夏に入って、暑さが感じられる今日この頃。

俺は例の武家屋敷の前でロリ子を待っていた。

辺りには街灯が一本だけ。

武家屋敷の回りは鬱蒼とした林？ 森？ のどちらが生い茂っている。

非常に不気味な印象を受ける。

だが、俺はその不気味な雰囲気を持つ屋敷より、街灯に激突している虫の方が怖かった。

いつ、何かのはずみでこちらに飛んできてしまつのだろうか、と思うと気が気でならない。

早くロリ子が来てほしい。

あいつは虫とかを怖がらないから、盾になる。

「先輩っ！　すいません、遅れちゃって…」

そんなこんなで、もし虫がこちらに飛んできたら、すぐに帰ろうと思っていたら、ロリ子がやってきた。

これで虫に襲撃されても、恐れる心配はなくなった。

ロリ子は走ってきたのか、汗をかき、息を弾ませている。

「ライオン丸宗谷先輩はいないとして…部長はどうしたんですか？」

「部長は体調が悪いつてさ。あの人、月に1回は体調が悪くなるけど、どうしてだろうね。ロリ子はわかる？」

「えっ……それは、その…」

ロリ子は何やら顔を赤くしてもじもじしている。

「何で恥ずかしそうにしてんの？」

「ふえ？　いいいや、何でもありません！」

未だに顔を赤くしたまま、手をぶんぶんと振っている。

こいつも大概、変わった奴である。

「と、言う事は……私と先輩の二人きりって事ですか？」

「そうなるね」

まあ、ロリ子がいれば何とかなるだろ。

主に虫避けとして。

「……そうですか。先輩と二人きりですか」

「？ ロリ子？」

「先輩と二人きり……若い男と女が夜に二人で密会……」

「おい、ロリ子？」

ロリ子の顔の前で手を振るも反応はない。

ぶつぶつと呟き続けるだけだ。

「えへ、えへへ……先輩と二人きり……怖がる私を、先輩は男らしく励まして」

「うわっ、虫だ！ ロリ子、盾になれ！」

ロリ子の体を持ち上げて、虫からの攻撃を防ぐ。

間一髪、虫の攻撃はロリ子の体で防げたが、ロリ子は未だに何かを言っている。

「あつ、先輩、駄目です！　こんな所で……って痛っ」

持ち上げたまま、顎を使ってロリ子の頭にドリル攻撃を仕掛ける。

「さっきからぶつぶつ何言ってるんだよ。早く行くぞ」

ぱつとロリ子の体を離して、地面に着地させる。

ロリ子はむっとした顔でこちらを睨んできた。

「何するんですか！。乙女の頭頂に顎ドリルをするなんて」

「お前が自分の世界に浸ってるからだろ。さっきから虫がぶんぶんうるさくて気持ち悪いんだ。早く調べて帰るぞ」

武家屋敷は雑草とか生え放題だ。

もうそこかしこに虫がいるだろう。

想像するだけで鳥肌が立つ。

「……いざ行くとなると緊張しますね」

ロリ子は今更ながら怖がっている。

まあ、確かに雰囲気は持っている。

廃墟らしく、所々剥がれた外装。

何年も人の手が入っていないのが見てとれる。

「オ力研の部員だろ？ ビビってないで早く行くぞ」

だからといって、行かない訳にはいかない。

部長にも行くと言ってしまったし。

これで、前まで行ったけど、中には入れませんでした、ではお話にならない。

いくら虫を怖がっても、虫より部長の方が怖い。

「あ、ま、待つてくださいよ、先輩！」

ロリ子が慌てて俺の後を追ってくるが、振り返る事無く武家屋敷の中へ侵入していった。

「う、うわああああああ！」

やばいやばいやばいやばい！

アレはやばい！

マジでやばい！

有り得ない。

何なんだ、アレは。

何なんだ、ココは。

人が立ちいつて良い場所ではない。

こんなに恐ろしい所なら来るべきじゃなかった。

「ま、待つてください!」

ロリ子が何か言ってるが、そんな事を気にしている場合ではない。

こんな所に居たら死んでしまう。

全力で足を動かしていく。

武家屋敷の中、周りを見る余裕すらない。

いや、見渡す勇氣もない。

この場所がこんなに恐ろしい所だとは思わなかった。

そこの学生が入っていけるような所だからと舐めていた。

しかし、ここはマジでやばい。

「はあっはあっ」

息が上がる。

少しの距離しか走っていないはずなのに、有り得ないくらい息が上がる。

もう何百メートルと走っている気がするが、未だに出口は見えてこない。

恐怖で竦んでしまいそうになるのを必死で抑えて走る。

男としてのプライドなんてどうでもいい。

この場所に一秒でもいたくなかった。

「はあ、はあ、は……何なんだよ、ここは」

しかし、やっとのこと出口が見えてきた。

武家屋敷らしく引き戸のドア。

だが、俺は見てしまった。そこにいるモノを。

「う、ぎゃあああああああ」

「先輩！ 落ち着いてください！ ほら、アレは私が退治しますから」

いつの間にか追いついていたロリ子が俺を抜き去って、引き戸の取っ手に張り付くそれを退治してくれる。

「ろ、ロリ子っ……ドアを開けてくれっ」

絶対に触りたくない。

ロリ子は無言でドアを開けてくれる。

俺は遮二無二ドアから飛びだした。

「有り得ねえ有り得ねえよ何だよアレ聞いてねえよ」
体が震える。

必死に抑えようとしても、震える体は言う事を聞いてくれない。

「先輩、怖がりすぎです。たかがクモじゃないですか」

「たかが！？ 手の平サイズのクモがたかが！？」

そう。俺は見てしまったのだ。

あの屋敷の中に蔓延る魑魅魍魎を。

「あんなでかいクモが存在するのか！？ この世界にあんな化け物がいるのか！？」

あれ程の大きさのクモを初めて見た。

いや、クモだけじゃない。

なるべく回りを見ない様にしていたが、それでも視界の隅に映る虫達を見てしまった。

もう、全体的に有り得ないくらい大きい虫達。

ここは人外魔境か？

「何でそんなに虫が嫌いなんですかー。そこまで気持ち悪くないですよ」

「うわ、てめえこっち寄るな！ さっきムカデを触ってただろ！」

ロリ子の神経がわからない。

あんなに足をうじゃうじゃさせ、人にも危害を加える化け物を触れるなんて。

「ひどっ…先輩、酷いですっ」

「うるせえ！ アルコール消毒の後、熱湯消毒して、一日中手を洗うまで俺の半径一メートル以内に近付くな！」

あー、やだやだ。

もうこの中に入りたくない。

部長に言ってしまったから入らないといけないのだろうが、もう嫌だ。

これなら部長のお小言をもらった方が良い。

「……先輩、そこまで言われると流石に傷付きます」

「はっ、関係ないね。虫に触れた奴に近付かれないなら、俺は人を傷つける」

もう帰ろう。家に帰って、風呂に入って、今日の事は綺麗さっぱりと忘れよう。

うん。それがベストだ。無理して頑張る必要はない。

「あ、先輩、携帯なってますよ」

いざ、帰ろうとした時、携帯のバイブの音が辺りに響く。

「ああ、悪い。出ていいか？」

ロリ子の頷きで俺は携帯に出る。

「あ、部長。え？ 例の武家屋敷の事ですか？ ああ、はい。何にもなかったです。たぶん見間違いか何かじゃないんですか？ ……え？ いやいやいや！ 本当です。何にもありませんでしたって。…ロリ子に代われ？ 何ですか。何にもなかったって言うてるじゃないですか。……はい、はい。わかりました、代わります」

ロリ子に携帯を差し出す。

「代わりました。はい、はい。……本当に何もなかったか、ですか

？」

俺は必死にロリ子にサインを出す。

何もなかったと言え、そうしたらお菓子を買ってやる、と。

しかし、ロリ子は表情を変えずに部長と通話し続ける。

「いえ、まだ見ていけませんので、それはわかんないです。先輩は虫が怖くてすぐに逃げ出しちゃいましたから」

「ちょ、てめえ！ 携帯返せ！ 部長、嘘です！ それはロリ子の……え？ ちゃんと確認して来い？ や、だから……う、でも……わかり、ました」

部長との通話を終え、俺は目の前が真っ暗になっていた。

もう一度あの中に入らないといけないなんて。

「ロリ子っ、てめえ何で本当の事言っただよ」

それよりもロリ子だ。

何故、本当の事を言ってしまったのか。

嘘をつけば、この恐怖から解放されたのに。

「部長に嘘が通用するとも思えませんし。それにっ、先輩が私に酷い事を言うからですっ」

「はあ？ お前、ムカデを触ったくせによくそんな事を言えるな。本当に人間かよ」

「な、なんでそこまで言われなといけないんですか！」

「お前は何にもわかってない。よくそんなんで今まで生きてこれたな。ムカデだぞ、ムカデ。百本の足をわしゃわしゃさせて動くような化け物だぞ。人が触っていいものだと思うのかよ。思わないよな。思える訳がない。お前が本当に人間なら思えないよな。そうだよな」

「え、ちょ、ちょっと待ってくだ」

「まさかアレを触って平気でいられるなんて、俺は幽霊よりそっちの方が怖いね。大体、前から思ってたんだけどさ。お前、平気で虫を触るけど、その神経何なの？ 人なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「先輩、だから」

「クモとかGさんは害虫を食べてくれるからいい虫だ、とか言われてるけどさ。あんなの見た目でもう害虫じゃん。人の気分を害する生き物なんて生きてたって何の意味もないね。それなら、蛇の方がまだ善良な生き物だよ。八虫類はある種の美しさすら」

「う、うるさい！」

虫の恐怖から八虫類の美点まで述べようとした所で、ロリ子が爆発した。

ここまで爆発したロリ子を見るのは初めてだ。

「先輩、落ち着いてください！ 虫は私が退治しますから、先輩は黙って私の後ろについてくればいいんです！ それでいいですよね！ じゃあ行きますよ！」

そう言つて、ずんずんと武家屋敷に向かつていくロリ子。

「……やだ…男らしい」

その背中を見て、不覚にもカッコいいと思つてしまった。

「俺には何にも見えない。虫なんかいない。いるのは妖精だけ。ぶんぶんしてる音は妖精の羽の音」

目を瞑つてロリ子の頭を掴みながら、武家屋敷の中を進んでいく。

武家屋敷の中を実況したいのだが、怖くて目が開けられない。

虫よけスプレーや殺虫剤を持つてこなかった自分を恨みたい。

「大丈夫。俺は出来る男だ。逃げちゃダメだ……ひつ、今、耳元を何かがっ」

「先輩、大丈夫です。虫はいません」

ロリ子の励ましも全く意味がない。

明らかに羽音がしているのに虫がないはずがない。

それでも、部長に命令、というより脅迫された手前、行かない訳にはいかない。

目を瞑り、虫に怯えながらも進んでいく。

「っと…ロリ子、急に」

「先輩、たぶんここです」

ロリ子が急に止まるものだから、俺は躓きかけてしまった。

もし転んで床に手を着いて、そこに虫の死骸があつたらと思うとぞっとする。

が、ロリ子の真剣な声で、気を引き締め直す。

ロリ子が止まった所。

たぶん、そこが例の落ち武者がいたとされる部屋。

ゆっくりと目を開く。

暗闇に慣れた目で、その部屋を視界に入れる。

障子は閉められている。

肝試しに行った生徒達の話からすると障子は閉められていないはずなのだが、しっかりと閉められていた。

「ふーん、ここか。ロリ子、何か感じる？」

「あ、はい。何か、凄く……何て言うんでしょうか、悲しい、って感じです」

悲しい、ね。

まあ、ロリ子がそう言うのならそうなのだろう。

こいつは何だかんだでそういうのに敏感らしいし。

「じゃ、開けますか」

障子に虫が張り付いていないかをしっかりと確認する。

その部屋の障子をよく見てみると、明らかに他との差異があった。

隣の部屋の障子は破られているのに、そこは破られていない。

それどころか、汚れすら見当たらない。

まるで、そこだけ時間が止まってしまっている様な

「ご開帳」

気にしてもしようがない。

虫がないのなら怖がる必要もない。

躊躇う事もなく、俺はその障子を開け放った。

落ち武者（４）

勢いよく障子を開けた先には、何もいなかった。

少し、拍子抜けした気分だ。そこまで気負っていた訳ではないが、やはりそれなりに緊張していたようである。

「何だ、何にもいないじゃん」

そう言って、俺はロリ子に振り向く。

あれ？ そう言えば、こんな遣り取り何処かで聞いた様な。

「……ロリ子？」

振り向いた先、ロリ子は俺を見ておらず、その先。つまり、部屋の中を凝視している。

こんな感じの遣り取りも聞いた様な気がする。

一向にロリ子が部屋から視線を外さないので、俺は振り返る事にした。

ゆっくりと振り返っていく。

そして、振り返った視線の先には、

「……マジか」

落ち武者がいた。

落ち武者はこちらを見ている。

こちらもち落ち武者を見ている。

落ち武者の格好は、話の通りに鎧を着込んでいる。割と豪華な鎧だ。

そして、刀を腰に差している。

髪の毛は、落ち武者によくあるあの髪型ではない。長い髪の毛。腰まで届きそうな程の。頭頂部が禿げている、なんて事はない。

「……」

誰も言葉を発さない。

恐らくロリ子は恐怖で口が聞けないのかもしれないし、落ち武者の方はこちらと会話する気はないのかもしれない。

だが、このまま見つめ合っていても意味がない。なので、俺が口を開く事にした。

「で、落ち武者さんはいつまでそこに立ってるの？」

部屋の中に入っていく。

この部屋の中も綺麗なままだ。

畳も、調度品もまるで新品の様である。

「この方が居心地いいな」

何より虫がない。

この部屋の外には虫が溢れていたというのに、ここは別世界の様に虫が存在していない。

素晴らしい。

部屋の真ん中、落ち武者の前。そこに胡坐をかいて座り込む。

「せ、先輩っ」

「ロリ子もこっちに来たら？ あ、障子は閉めてね。虫が入ってくるから」

慌てたようなロリ子だが、障子を閉めて、部屋の中に入ってくる。

「落ち武者さんも立ってないで座ったら？」

下から落ち武者を見上げてみれば。

そこにはびっくりするほど綺麗な顔立ちの落ち武者だった。

落ち武者は言葉に従ってか、それとも何か思う事があったのか、正座で座り込む。

着込んでいる鎧といい、座る動作の洗練された様子といい、この落ち武者はそれなりの家の者なのかもしれない。

正面に座った落ち武者は未だに口を開こうとしない。

「そんな堅苦しくなくていいんじゃない？ もっと、こうフランクにいいようよ」

「先輩、落ち武者にフランクって言葉は通じないと思います」

「あ、そっか。じゃあ、えー…もっと友好的にいいようよ」

こちらの言葉を聞いているのかいないのか。

落ち武者は正座を崩そうとしない。

「……ま、いつか。で、落ち武者さんは何の未練があってこの世に残ってるのかな？」

その後も色々と話しかけたが、落ち武者は一向に口を開かない。

ロリ子もいつの間にか俺の隣に正座して落ち武者に話しかけていたが、それでも反応しない。

ひたすらに俺とロリ子を見ている。

「中々口を割らないな……よしっ、ロリ子。何か一発芸をやれ」

ここまで口を割らないと、むしろ何としても口を割らしたくなる。

ついでに言えば、その仏頂面を笑わせたくなる。

「ええ！ 私ですか？ 一発芸なんて持ってません！」

「お前がやらなかったら誰がやるんだよ。こいつにやらすのか？」

「先輩がやればいいじゃないですか！」

「無理無理。人前で何かやるの恥ずかしいし」

一発芸。ない事もないが、受けるかどうかは別だ。

「という訳でお前しかいない。ほら、やれ。子供が喜ぶ真似とかなら普通に出来るだろ？」

「む、どういう意味ですか？ 私が子供っぽいとも言ってますか？」

「……この前言ってた遊園地に連れてってやるよ」

「本当ですか！？ やったー！ 一度行ってみたかったんですよ
あそこ！」

……マジで子供みたいに喜ぶな、こいつ。ちなみにその遊園地は子供向けらしい外装をしている。

ロリ子はどのアトラクションに乗ろう、なんて今どきの小学生なら言わなそうな事を言っている。

「ねえねえ先輩。ジェットコースターとかどうですか？」

「お前の身長じゃ乗れないだろ」

「あー、また馬鹿にしてー。あそこの遊園地のジェットコースターはですね。なんと！身長125センチ以上あれば乗れるんです！」

それってどう考えても子供むけのジェットコースターだろ。

と、まあいつもみたいにロリ子と馬鹿な話に興じていた。

既にロリ子は落ち武者の事など思考の隅に追いやられているようで、俺は俺で口を開かないならもういつか、と思い始めていた。

「貴方達は…自分の事が怖くないのか？」

そんな事を思い始めていた時に、ようやく落ち武者は口を開いてくれた。

「ちょっと黙っててください！今、先輩とのデートのシミュレーションしてるんですから！」

えーと、お化け屋敷に行つて、怖がる振りして先輩に抱きついて、その後に一緒にご飯を食べて、あーんってやりあったりして、そし

て最後に観覧車に乗って、そこで……えへへ

なんて一人で暴走しているロリ子は無視して、落ち武者に向き直る。

「俺は怖くないし、そっちのガキも怖くないみたいだ」

ロリ子は落ち武者の事など、思考の隅どころか、完全に頭から抜き去っているようだ。

ニヤニヤ笑いながら独りごとを呟いている。

何か気持ち悪く体をくねらせているので、触れない事にする。

「そうか。貴方達は自分が怖くないのか。珍しいな。大抵の人間は自分を見ると逃げていくのに」

「まあね。俺は靈感とかさっぱりだから何が怖いとかわからないし、そこでくねくねしてる気持ち悪いのは見慣れてるってのもあるからなあ」

ロリ子は未だにくねくねしている。

駄目です、先輩！ 私達、まだ高校生ですよ、とか、先輩がそこまです言つのなら、とか聞こえてくるけど、もう無視だ。視界にすら入れたくない。

「幽霊って言ってもさ。こう、見た目綺麗な感じの幽霊を見ても怖くないんだ。スプラッタなゾンビとかは苦手だけどさ」

血がどばーとか、内臓がぐちゃーとか、そういう幽霊がいたらーも

二もなく逃げているが、この落ち武者。髪の毛が伸び切っているくらいで、特に人間とは変わりがない。

「すばらった？ ゾんび？」

「ああ、えーっと……内蔵とかが飛び出ている死霊って言った方が
良いのか」

「ああ、そうか。自分もそういった類は苦手だ」

ほう、この落ち武者もそういうのが苦手らしい。

話が合うな。

部長もライオン丸宗谷もロリ子もそういったゾンビが出てくる映画
が好きだから話についていけなくて困っていたのだ。

「ああ！ 駄目です先輩！ そんな所、汚ない」

「ってうるせえよ、ロリ子！」

いい加減鬱陶しくなってきたロリ子の頭をはたく。

ぺこん、と中に何も詰まっていなさそうな音がした。

「いたっ…何するんですかー。先輩とのシミュレーションをしてた
のに」

「そついうのは周りに人がいない時にやれ」

全く、何を考えているんだこのロリっ子は。

落ち武者さんが気分を害して、また黙ったらどうすればいい。

「ははっ。面白いな、貴方達は。もしかして恋人同士なのだろうか」と、気分を害すと思いきや、その仏頂面を笑顔に変えて笑ってくれた。

が、ついでに有り得ない事を言ってくれた。

「そうです!!」

「違う!!」

「ロリ子！ お前、何を同意してるんだよ！ 有り得ないだろ！」

「何言ってるんですか！ 先輩の方こそ有り得ないです！ 私をそんなに強く抱きしめてくれたのに！」

「それはお前の妄想の中の話だろ！ 俺はロリコンじゃねえ！」

「妄想じゃなくても実際に抱きしめてくれたじゃないですか！」

……そう言えば、そんな事もあったような。

「そんなの、兄が妹を慰める様なものなんだよ！」

「え？ もしかして先輩……お兄ちゃんとか言われたい人ですか？」

「は？ 違うって」

「照れなくていいですよ。私、お兄ちゃんなんて単語、絶対に言わないつもりでしたけど先輩になら言えます……ね、お兄ちゃん」

「ぐ……結構そえられるものが……あるかあ！」

実はちょっとだけぐつときたのは秘密だ。

「つーか、落ち武者！ あんた、何有り得ない事を言ってるんだ！
どっからどう見ても恋人には見えないだろ！ 兄と妹だろ！」

「お兄ちゃんは私の事嫌いなのか？」

「ロリ子は黙ってる！ あんた、その目は節穴か？ 本当に見えてんのか？ 目が悪いんじゃないのか？ どこをどう解釈してもそんな結論は出てこねえだろ」

ずいずいと落ち武者ににじり寄っていく。

迫力に押されたのか、落ち武者は正座のまま体を仰け反らせる。

「い、いや。あまりに仲良く見えたので……」

「仲良かったら恋人なのか？ そうだとしたらその辺の仲が良い男女は皆恋人になるぞ。それなら日本に少子化なんて現象は起こらないし、婚活なんて社会現象もおきないはずだ。彼女が出来ないといつて涙を流す男もいない」

「……何を言っているのかはよくわからないが、自分は……間違った事を言ったのだろうか」

「ああ、間違ってるよ。世間は広いんだからもつとだな、大きな視野を持って、多角的に物事を捉えようぜ」

大体、俺とロリ子を恋人とみなすなんて、俺も許さないが、世間的にも許されないだろう。

実はロリ子と家が近いのに一緒にこの武家屋敷に来なかったのは、警察とかに見られて、児童連れ去りの犯人とかに間違われたくなかったからだ。

いや、待てよ。

確か昔の日本は（見た目）ロリ子くらいの年頃の女の子を妻として迎え入れたと聞くし、もしかしたらこの武士もそういった人間なのかもしれない。

つまりは、ロリコンなのか。

だとしたらロリ子が危ないな。

いくら落ち武者が綺麗な顔立ちをしていてもロリコンはよくない。

「む、何だその目は。まるで自分を非難するかのようだ」

「ような、じゃなくて非難してるんだよ。有り得ないな、あんた。小児性愛者かよ。もしかして、アレか？ あんた十二、三の女の子を妻にしたのか？」

「……いや、自分は結婚をしていない。立場上、結婚は出来なかつ

ただ」

少しだけ落ち武者の雰囲気が変わる。

今まで笑った事を除いて仏頂面だったのが、歪む。

膝の上で握りしめられた拳が震えている。

「自分は……貴方の言う通り世間知らずの人間だった」

言葉が絞り出す様に零れ出る。

「自分の立場を弁えていたし、それで仕方がないと思っていた」

顔は少しずつ俯いていく。

「こんな所に未練がましく居ついているのは……」

震える肩が弱々しく見える。

「自分は……自分は、恋がしたかったのだ」

そして、呟いた言葉。全く予想も出来ない言葉だった。

その家の第一子として落ち武者は生まれた。

続いて第二子、第三子と立て続けにその家には子供が生まれた。

落ち武者の家は有名と言える程ではないが、それなりに力を持った武者だった。

武者としてこのままではよくない、と落ち武者は無理矢理武士にさせられた。

「え？ よくわからないんだけど」

「先輩、黙って聞きましょう」

自分の立場上、結婚が許されたものではない事を、落ち武者自身は理解していた。

家を存続させるならば、落ち武者が子供を作る必要はない。

妹達が子供を作り、男児を産めば済む。

だから、落ち武者は自身を偽って、武士として生きていた。

戦場も何度か赴き、運良くと言っていいのか、生き延びる事が出来た。

しかし、それも長くは続かない。

とある戦場で、落ち武者はその体に矢が刺さり、瀕死に陥った。

泥まみれの戦場で、自身も泥に塗れて、血を流しながら倒れて、空を見ていた。

空は青々としていて、自身が死んでしまう事なんてどうでもよくな
った。

家の事。仕えた主の事。自身の立場。

全てがどうでもよくなった。

どうでもよくなってしまったから、強烈な欲望が生まれてしまった。

それは、恋をしたいという感情と欲望。

誰かを好きになって、誰かに好きになってもらって。肌を触れ合い、
気持ちを酌み交わす。

死ぬ間際、強く、強く思った。

叶えられない願いだからこそ強く願ったのだろう。

気付けば、死んだはずの落ち武者が現世に留まる程の強い気持ちを
抱いていた。

落ち武者の独白が終わって口を開く者はいない。

落ち武者は語り終えた余韻で黙っているのだろうし、ロリ子は何や
ら目をウルウルさせて頷いている。馬鹿みてえ。

で、俺は何を言っているのかわからなかった。

正直、この落ち武者が何を言っているのかよくわからなかった。

いや、まあ、結婚できなくて恋も出来なかったと言っているのは理解できたが、立場上なんたらかんたらの意味がよくわからない。

長男として生まれたなら、どう考えても結婚させられ、子供を作る事になるのだろうが、何故、落ち武者はそれが“立場上”出来なかったのか。

むしろ、立場上、最も結婚しなければならぬのでは？

いや、この落ち武者は恋をしたかった訳で、結婚がしたかった訳ではない。

じゃあそついう結婚の話は軒並み断っていたのか？

いや、でも結婚も出来なかったと言ってるし、そついう訳ではないのだろう。

よくわかんねえな。

「落ち武者さん！ その気持ちわかります！ したいですね、恋、したいですね！」

ロリ子は落ち武者と同調してるし。鼻息荒い。

「誰かを好きになって、胸がきゅうって締め付けられる感じ、味わ

「いたいですよね！」

まな板が何を言っているんだか。

「私は恋してるんですけど、相手の人が全然振り向いてくれないんです。恋って辛い事もあるけど、やっぱりいいものですよ」

ロリ子に好かれてる奴がいるのか。

そいつはご愁傷様だな。

まあ、でもロリ子の恋話はどうでもいいか。

とりあえず、この落ち武者に思い知らさないといけないし。

「ロリ子、お前は黙ってる」

さつきから訳のわからない事を言っている。

恋がしたい？ それが何だというのだ。

たったそれだけの思いで、こんな所に何百年も居続けたのか。

たったそれだけの思いで、“一人で”後悔していたのか。

馬鹿らしい。そんなに後悔をするなら生きている間に恋をしておけばよかっただろう。

死んでから“一人で”後悔し続ける必要はなかっただろう。

「恋がしたいと言ってる訳だけど」

そんな事は無理に決まっている。

「お前はもう死んでるんだ」

落ち武者はずっと前に死んでいる。

恋がしたいとか、聞いて呆れる。

死んでいる人間が“一人で”何かをしようなんて、思いあがりも甚だしい。

「わかるか？ お前の願いはもう絶対に叶わない」

死んだ時点で全てが終わり。

元々、幽霊なんて信じていなかったから、死ねば全てが終わりだと思っていた。

まあ、今でも思ってるけど。

「お前は本当に恋したかったのか？ 心から願っていたのなら、何もかもを無視して好きな人でも見つければよかったんじゃないのか？」

「そんな事は、出来なかった」

「は、だろうよ。結局、お前は何も考えていなかったんだよ。与えられた事を何も考えずにやっていただけ。で、最期の最期で子供み

たいな我儘を言い始めた」

与えられた立場とか、自分を形作るものを漠然と受け止めていただけ。

「恋がしたい？ 馬っ鹿じゃねえの。どこのガキだよ。自分の立場を受け入れてたなら、最期まで受け入れておけよ。最期まで、それこそ終わってから気高く生きろよ」

立ちあがり、落ち武者の元へと歩み寄る。

「何だ」

落ち武者が立ちあがる気配は見られない。

睨むようにこちらを見据える落ち武者の頭をグーで力一杯ぶん殴った。

「何をする」

「除霊だよ。この世にいたくなくなるくらいにぼこぼこにしてやる。立て、へたれ野郎」

落ち武者はゆっくりと立ち上がる。その目は反抗的で、ただ殴られるだけではなさそうだった。

「は、やる気か？ じゃあ刀を置けよ。素手の勝負が男の勝負だろ？」

落ち武者は不敵に笑って刀を畳の上に置く。

そして半身になって構えた。

「いいね。手加減はいらねえ。全力で来いよ」

除霊開始だ、この野郎。

「で、君はどうしてそこまで顔が腫れあがってるんだい？」

「簡単に言つのなら、奴がとんでもなく強かった、という事です」

戦場を駆け抜けた落ち武者VS特に鍛えてもいない現代人。

無謀で無能な戦いにも程がある。

こちらの攻撃が当たったのは、最初の不意打ちのゲンコツだけで、後は一発も当たらない。

こちらの攻撃は当たらないのに落ち武者の攻撃は当たる当たる。

顔を殴られ、腹を蹴られ、腕を掴まれ投げられ、足を踏みつけられ、と顔どころか全身腫れあがっている。

「ふむ。そうか。なに、男子ならばそういう顔になるのも悪くはない」

「と言っても、これは腫れあがり過ぎじゃないですか？」

落ち武者が手加減しているのはわかった。

全力で放った拳は易々と避けられ、足を掛けられ、転ばされる。

余裕綽々に笑っていた奴の顔が恨めしい。

だが、俺はそれを見て優雅だと思った。

「いや、君の魅力が失われるものではないよ」

「そうですか」

背は高い方だが、顔はそれ程でもない俺の魅力とは何なのだろう。

どうでもいいか。

とにかく、俺と落ち武者の戦いは、落ち武者の圧勝に終わった。

俺は荒々しく息をつき、畳の上に倒れ込んでいたのだが、落ち武者の方は何事もなかったかのように立っていた。

数分程、倒れ込んでいたが、そこは男と男の戦い。倒れ込んだままにいるのも悪いので、俺は痛む足を我慢しながら立ちあがった。

そして、手を差し伸べた。

落ち武者は最初、何が何だかわからないといった顔をしていたが、すぐに思い至ったのか、俺の手を握る。

そこで、男と男の熱い握手が交わされたのだ。

それから二人とも何故か面白くなってしまい、爆笑した。

お前、めちゃくちゃ強いじゃん、いや、貴方が弱すぎた、言うねえ、このへたれ野郎、などと言い合いながら。

「でも、落ち武者の気持ちもわかるものではないか？ 立場上、結婚できなかったのも仕方がない」

「ま、そうですね。でもロリ子に言われるまで気付きませんでしたから」

「君らしいね」

「ロリ子にも言われました、それ」

ぼこぼこにされたが気分が良かったので、記念として奴の名前を尋ねた。

しかし、奴は自分の名前を覚えていないという。

ならば俺が付けてやろう、となり、俺は落ち武者の名前を付け、ついでに俺の名前も言っ、もう一度強く握手をした。

「君は落ち武者に名前を付けたのか？」

「ええ、そうですね。何かまずかったですか？」

「いや、ふむ……だからか」

「……？」

握手をしたまま、落ち武者の体が透けていく。

ああ、成仏するんだろうな、俺、落ち武者に文句を言っただけにされたくらいしかしてねえじゃん、とか思いながらそれを見ていたら、落ち武者は最期に笑って言うてくれた。

ありがとう、こんなに笑ったのは初めてだ、と。

特に何かをしたとか、そういう訳ではないので、ありがとうと言われるとむず痒くなった。

と言うより、男らしくなくうじうじしていた態度にムカついて頭を殴っただけだった。

だって、たかが恋がしたい、なんて思いであんな虫だらけの屋敷に“一人で”居続けるなんて辛すぎる。

落ち武者の反応の限りでは、怖がられても気にしていなかったのだろつ。

怖がられたら辛いに決まっている。

一人は寂しいに決まっている。

それらを当たり前のように受け入れていた落ち武者に腹が立ったただけで、俺は何もしていなかった。

それなのに、消える瞬間にもう一度、ありがとう、と言ってくれた。願わくば、落ち武者に恋する相手が見つかってほしい。

「それが事の顛末かい？」

「はい、部長」

オカルト研究部の部室で俺と部長の二人きり。

ロリ子は用事があるとの事で、ライオン丸宗谷はいつもの如くサボりだ。

部長は専用の机に拵えてある革張りの高級そうな椅子に座りながら、昨日の事を聞いていた。

別にどうでもいいかもしれないが、部長の体調はもうよくなったのだろうか。

「ああ、もう終わったからね」

「何がですか？」

「何って、君。乙女にそれを言わすのかい？」

部長は乙女と言うより、女傑と言う方が似合っていると思うけど。

「何を考えているのかな？」

「いえ、何も？」

西日が差しこむ夕暮れ時。と言ってもオカルト研究部の部室にはあまり日は差し込まないけど。

俺と部長はいつもみたいに話し合っていた。

「で、そこにいる武士娘は誰なんだい？」

と、部長は俺の背後を指差しながら問うてきた。

「はあ、何でかわかりませんが、落ち武者に憑かれたみたいで」
振り返ればそこには。

俺が男と思いこんでいた落ち武者　雅　が申し訳なさそうに佇んでいた。

「自分は貴方に名前を付けられましたから。貴方が私の主人です」
鎧を着ていたから、体つきとかわからなかったし、喋り方も男っぽいから男だと思い込んでいた。

しかし、よくよく見てみれば、女性の様な柔らかさを感じる。

若干釣り目がちではあるが、涼やかな目元に、低く筋の通った鼻梁。明るい所で見てみれば、桃色の唇に、腰まで伸びた艶がある黒髪。

総じて見れば、男と勘違いする方が難しかった。

思い込みって怖いね。

「ふむ、主人か。よかったな。奴隷ができたじゃないか」

「奴隷って言い方はどうかと思いますよ」

「ご主人様とは呼ばせないのか？」

「……」

「その無言は肯定と捉えてもいいのかな？」

部長が笑いながらこちらを見ている。

くそう、その嫌らしい笑い方までもが様になっているぜ。憧れてしまふ。

「それはまた別のお話として……俺は何でこいつに憑かれてるんですか？」

「ああ、それかい？ 簡単な話だ」

部長は脚を組み、顎に手を当てながらニヤリと笑った。

薄暗い部室の中、部長の姿がいやにカッコよく見える。

「持論ではあるが、幽霊に名前を付けた者は憑かれてしまう、らしいからね」

ライオンとヴァンパイア

どいつもこいつも見た目で判断しやがる。

外面だけを見て何がわかるというのだ。何が駄目だというのだ。

そうやって人を色眼鏡で判断するのが大人のやり方なのか。

大人とは子供の見本となるべき存在ではないのか。

差別はいけません？

人類皆平等に？

は、差別や不平等を常とするお前らが言えた事か。

馬鹿らしい。

何もかもが馬鹿らしい。

私の何を知っている。

私の何を知っているというのだ。

何も知らないくせに、好き勝手言いやがって。

こんな世の中、狂ってしまえ。

こんな国、滅んでしまえ。

こんな世界は、死んでしまえ。

私とその部活に入ろうと思ったのは、ただ楽そうに見えたからだ。

私を通う高校は生徒全員に部活動に所属する事を義務付けられているので、私は一番楽そうに見えた部活に入部しようと思った。

第一文芸部。

私に最も似合わないと思った。

部室のドアを叩けば、現れたのはボブカットの女生徒。

スカーフの色が赤色だから恐らく二年。

その女生徒は私を見ると楽しそうに笑った。

おや、変わった子が来たみたいだね

と言いながら。

その時点で、私は既にこの部活に居場所はないと思った。

やはり見た目で判断される。やはり私は異端だと思い知らされる。

私の鬱屈した感情がその女生徒に伝わったのか、そいつは笑顔から真顔に変えて私の手を引いた。

とりあえず、中に入ろう。君の仲間は今もう一人いるよ

と言いながら。

引かれるままに部室に入る。

別にこの手を払いのけてもよかったし、文句を言っただけで退室してもよかった。

けど、何故だかはわからないが、この女に逆らってはいけない気がした。

部室の中は色々な物が散乱していた。

机を挟んで両側に置かれた黒革のソファの上にはたくさんの紙が散らばっていたし、その正面に備えられた机の上には得体のしれない道具みたいなのが所狭しと並べられていた。

顕微鏡の様な形をしているが、レンズの部分に鉛筆が刺さっている。文芸部では使わない様な代物だった。

私がそれを見ていると、女は私から手を離し、部屋の一番奥にある机に歩いていった。

それは私のオリジナルだ。気にする必要はない。

歩きながらもその説明をしてくれる。

女が歩み寄っていった机の上には資料らしきものが山積みになっていた。一突きすれば雪崩を起こしそうな程に。

またもや私がそれを注視していると、女は説明してくれた。

ああ、これは先代が残した物だ。私の所有物ではない。しかし、どうにも捨てきれなくてな、と苦笑しながら。

後にそれは嘘で、捨てきれないのではなく、どう処理していいかわからなかったと知るのだが。

女は机に拵えられた黒革の高級そうな椅子に座った。資料の山から顔がやっと見えるくらいだ。

私はこの部の部長だ。そこにいるのは君と同じ新入部員。

女が指を差し、言ってくれた事でようやく気付いた。

部室に備え付けられた本棚の前。そこに男がいた。

この部室はそこまで広いものではない。中に入れば全体が視界に入る。

それなのに私は指摘されるまで、そこにいる男に全く気付かなかった。

背が高いのに全く。

今年は面白そうなのが二人も入った。さあ、お互い自己紹介

だ。そうだな。レディファーストでいこう。君から頼むよ。ああ、
勿論、二人は向き合ってね。

女が私を見ながら自己紹介するように促す。

女の顔は生き生きとした笑顔で、楽しくてしょうがないといった感じだ。

促されるままに私は男と向きあう。

男は私を見ても表情を変える事無く、無表情。

こついった反応をされるのは初めてだったので、私は少し戸惑いながら自分の名前を言った。

ふむ。良い名前だ。次は君だな。さあ自己紹介を頼むよ。

男は女に促されても口を開かない。

私の事をじっと見ている。感情の読めない目で。

数秒か、数十秒か、数分か。

正確な時間はわからないが、私と男はしばらく見つめ合っていたと思う。

しかし、男は思い出したかのように口を開いた。

お前、ライオンみたいでカッコいいな

と言いながら。

ライオンとヴァンパイア（２）

今日は週一の定例会。

定例会と言っても、部室で、最近こんな事があつたとか、あそこのお店のおれがおいしいとか、あのお菓子はおいしいですよとか、先輩、遊園地の話はどうなったんですかとか、自分は映画館とやらに行ってみたんですとか、オカルトちつくな話とは全く関係のない話をする。

言いかえれば、部員同士の交流会みたいなものだ。

新しく部員 と言つてもいいのかわからないが 入ったので、その歓迎も込めている。

俺に憑いた落ち武者。男と偽って武士の時代を生きた武士娘、雅の歓迎だ。

「さて、雅君。君の願いは恋がしたい、だったかな？」

「ああ、そうだ。自分の願いは恋をする事。恋が出来ればこの世から未練なく去れる」

ちなみに、雅は俺以外には敬語を使わない。

そして、オカルト研究部の人間以外にその姿は見えない。

謎だ。

「ふむ。それは本当かね？」

「……………本当と言うと？」

「恋とは素晴らしいものだ。もし誰かに恋をしたら尚更この世から離れられなくなってしまうのではないかな？」

「あー！　そうですよ、雅さん！　好きな人がこっちにいるのに向こうに行ける訳ないじゃないですか！」

「む、む……………そうか？　恋とはそこまで人を惹き付けるものなのかな？」

「ああ。君は恋をした事がないのだろうか？　一度燃え上ってしまつと、その人以外の事は考えられなくなるぞ。それこそ成仏したいなんて思えないだろう」

「部長の言う通りですっ」

……………交流会のはずなのだが、俺はハブられている。

ガールズトークに男が入っていきえると思っているのか、この人達は。

「そうか。恋とはそういうものなのか……………あの、ご主人様」

なんて他人事気分で家から持ち込んだ漫画を読んでいると、雅から有り得ない呼ばれ方をされた。

「「ご主人様！？」」

ちなみに驚いたのは俺とロリ子である。

「ちょ、ご主人様って！ いきなり何言い出してんだよ！」

「…む？ ご主人様が呼んでくれと言ったからですが…」

「一回だけ呼んでくれって言ったただだよ！」

とりあえず、雅にご主人様と呼んでくれと頼んだ事がある。

その時にご主人様と呼ばれてそこはかとなく良い気分になったのだが、どこか踏み込んではいけない領域に踏み込みそうになったので、そこで打ち切った、はずだった。

「……先輩。それはないと思います」

「何だよその目は！ 一回だけだよ！」

「先輩ってロリコンのくせにそういう属性も持っているんですね」

「ロリコンでもないし、そういう属性も持ってねえよ！」

「私の体をあんなにも情熱的に抱きしめてくれたのに……遊びだったんですか？」

「人聞きの悪い言い方をするな！ つーか、お前自分がロリっ子だって認めたな！」

あの時はそうしないといけないと思ったからそうしたのであって、やましい気持ちなどなかった。

「はいはい。君達二人が仲が良いのは良かったから。雅君の言いかけた事を聞こうじゃないか」

ヒートアップしてロリ子の頭にアイアンクローをかましていると、部長は楽しそうに笑いながら雅の話の続きを促した。

「む、すまない。それで、ご主人様」

「お前の中でそれはもう決定なのか!？」

「ご主人様はご主人様です」

こいつ、俺をいじめたいのか？

「その、折り入って頼みたい事があるのですが」

「え？ ああ、いいよ。俺が出来る事なら」

て言うか、よくよく考えればこの状況結構面白いんじゃないか？

現代の学校の制服に包まれた生徒達と鎧を着込んだ落ち武者がソファに座って顔を突き合わせて話している。

そうそう見られるものではない。

「恥ずかしいのですが。その……ご主人様に、恋を教えてもらいたいのです」

「」
「」
「は?」「」

今度は雅を除いた三人が声を揃えた。

「な、何を言つて」

「駄目だ／です!!」

雅に事の真相を聞きだそうとしたら、部長とロリ子が物凄い剣幕で怒鳴った。

「何を言っているんだ、君は！ 彼に恋を教えてもらおうなんて考へてはいけない！ 彼ほどそういう事に向いている人間はいない！」

「部長の言つ通りですっ！」

え、俺って本格的にいじめられてるの？

まるで、駄目人間のような言い方されていないか。

「だが、自分はご主人様以外の男性と話せない。ご主人様以外に誰がいるんだ？」

「悪い事は言わない。彼だけはやめておいたほうがいい」

「先輩に恋をすると辛いと思いますよ」

…うーん。何だか泣きたくなってきたぞ。

何でだろうね、あはは。

「ああつ、先輩、違います！　そういう意味じゃなくてですね！　だからそんなに丸くならないでください！」

「そ、そうだぞ！　君が駄目人間と言っているのではなくてだな！　何と言えいいのか……」

部長とロリ子が何かを言っているが、俺には聞こえない。

二人とも酷いや。部長なんて駄目人間って言っちゃってるじゃないか。

なんて、いじめてソファの上で丸くなっていると部室のドアが開けられる音がした。

既に全員そろっているの、部室のドアが開くはずない。

不思議に思い、顔を上げてそちらを見てみたら、そこには　俺の勝手なイメージだが　ライオンみたいな女の子。

「　　え、何だよその武士」

久しぶりに来たライオン丸宗谷が驚いた様な顔をして立っていた。

「あのさ、ライオン丸宗谷って言いにくいから呼び方変えてもいい？」

部長とロリ子は如何に俺が駄目な人種であるかを部室の隅で雅に教え込んでいる。

二人の話を聞いていると自殺したくなりそうなので、ライオン丸宗谷と話をする事によって、それをシャットダウンする事にした。

「いいけど……ってお前が付けたんだろ」

「いや、そうだけども。何か言いにくいじゃん。ライオン丸宗谷って」

ライオン丸宗谷を初めて見た時に、びびつと来た。

あ、こいつはライオンだって。

ライオン宗谷も言いにくいので、ライオン丸宗谷に変えたのだが、これも長くていいにくい。

一年ほどたってからそれに気付いた。

「勝手にしろ」

「わかった。……じゃあ、ライオン丸から取ってイオンは？」

「体に良さそうな名前だな……ってライオン丸から取るなよ！ 宗谷か紅緒かどっちかから取れよ！」

「あ、いや。お前はイオンってイメージじゃないな……マル？」

「人の話を聞けよ！」

いいな、マル。

部長にはいじめられっ放しだし、ロリ子は部長と一緒にいると俺を攻撃して来る。

雅は雅でこちらが不利になる発言をする。

その点、マルは律儀に反応してくれるし、ツツコミ気質な奴である。
いじりがいがあるぜ。

「ロリ子よりマシなあだ名だと思うけど？」

「あ？ まあ、確かにロリ子よかマシだとは思っけどよ。ってかロリ子も普通に呼んでやれよ」

「えー、でもぴったりだと思わねえ？ 名前からも取ってるし、ロリ子が定着してるじゃん」

「そうだけだよ……」

ロリ子の名前の由来は、何もそのロリロリしい見た目からだけではない。

あいつの名前を聞いた時、あ、ロリ子だ、と思ったのだ。

「それじゃ、マルで決定な」

「何がそれじゃ、なんだよ……」

今日からライオン丸宗谷改め、マルと呼ばせてもらおう事にしよう。

「で、マルは何しに来たの？ お前、いつもはここに来ないじゃん」

「マルは決定なのかよ……」

はあ、なんて溜め息をついているマルだが、いつもみたいな気だるげな表情は変わらない。

表情は変わらないが、向かい側のソファから身を乗り出す様にして話を始めた。

「お前、吸血鬼の噂を聞いたか？」

吸血鬼。聞いた事もないな。

「聞くだけ無駄だったな。お前がそういう噂を知ってるわけないし」

失礼な事を言う奴だ。俺だって色々な噂を知っている。

例えば……えー、落ち武者の噂、とか？

「それはそこにいる武士の事だろ。解決した事を言ってんじゃねーよ」

解決はしていないと思うけど。憑かれてるし。

まあ、いい。それより吸血鬼だ。

この日本に吸血鬼。ミスマッチだな。

吸血鬼と言えば……えー、何だったかな？ やべえ、何もわかんねえ。

「吸血鬼の噂かい？ ライオン丸宗谷君は意外と耳が早いね」

吸血鬼に関する事柄を必死になって思い出そうとしていたが、実の所、何も知らないと思ひ至り、もう思考を放棄してマルの尖がった風貌を見ていたら、俺が駄目人間であることを雅に余すことなく伝えきったのか、部長が俺の隣に座りながら話に割って入ってきた。

「ん？ 君のその顔は吸血鬼の事なんて何も知らないって顔だね。わかった。私が吸血鬼の事を簡単に説明しよう」

部長ったらご明察。こちらの表情を見ただけでわかるなんて。

「吸血鬼、ドラキュラ、ヴァンパイア、ヴァンピール。名称は様々あるが、要するに血を吸う鬼の事だね。元々は東ヨーロッパの民間伝承から起源が発生したとされている。吸血鬼っていうのは、一般的には死者が何らかの理由で生き返った者の事を指すんだ。生前に犯罪を犯した、信仰に背いた行為をした、惨殺された、自殺したとかね。まだまだたくさんあるけど、長くなるから割愛するよ。吸血鬼の姿は生前のままだったり、血の塊だったり様々あるが、私達のイメージでは美しい女性ってイメージじゃないかな？」

そうなのか？

吸血鬼のイメージ自体が頭がない。

「君に聞くのが間違いだったかな。それで吸血鬼というのは魔力を持ち、その者の眼を見ただけで魅了したり、操ったりする力を持つとされている。この魔眼というのが割と有名だね。他にも不老不死だったり、コウモリや霧に変身する力を持つとされているかな。吸血鬼を退治する方法も様々あるね。有名なのはニンニクをかざしてみたり、銀をかざしてみたり。殺す方法としては木の杭で心臓を突き刺す方法や首を切り落とすなどがある。まあ、それはどうでもいいか。人間が吸血鬼を退治するのはまず不可能だろうしね。吸血鬼を退治する事を生業とする人間もいたが、彼らは吸血鬼との混血で特別な力を持っていたらしいからね。そうだね、私の知っている事といったらこんな所かな。西洋の事はあまり詳しくはないんでね」

苦笑しながらそう言う割には、よく知っていると思う。

「まあ、ウィキった情報だからね」

部長ったら現代人。

「私個人が吸血鬼に対して思う事はもつと生臭いよ。東ヨーロッパの農村部では信じられてきたと言ったけど、それがどういう意味かわかるかい？」

「……えー、お金が」

「違うよ。吸血鬼というのは異常者を指していたんじゃないかと思う」

違っていても最期まで聞いてくれよ。

「古代や中世の農村部は近親相姦が当たり前の様に行われていたの

さ。血が濃くなれば当然に奇形児や精神に異常を持つ者も現れる。かの徳川家の十二代目、徳川家斉もそうだとされているよ。話がずれたね。まあ、そういった異常者達が家畜を襲ったり、人間を傷付けたりしたんだと思う。人間と言うのは異常を嫌うからね。少しでも自分達と違う形、違う行動をすれば、それはもう人間じゃないのさ」

民俗学的な話だな。お祭りの裏側の話を聞いているみたいだ。

俺の勝手な解釈だが、日本各地に存在する祭りは、人柱を奉るためのものだったんじゃないかと思っている。

どうでもいいか。

「吸血鬼の事は大体わかりました。それで、吸血鬼の噂って何ですか？」

「それはライオン丸宗谷君に話してもらおう。久しぶりに部活動に来てくれたんだしね」

部長は向かいに座るマルに話を振る。

マルは尖がった奴ではあるが、部長に逆らう事はしない、出来ない。

「あ、部長。こいつ今日からマルになりましたから」

「ん？ そうなのかい？ じゃあマル君、頼むよ」

そう言えば、ロリ子と雅はどうしたのだろう。先程から会話に入っていない。

不思議に思い、部室を見回してみると、二人は未だに隅で何事かを話し合っていた。

先輩はですね、普段は孫の手より役に立たないんですけど、いざつて時はやりますよ、え？ いえいえ、頭もそれ程ですし、運動もからつきです、子供より使い物にならないんですけど

これ以上聞いていると本格的に自分の存在意義について疑問に思わざるを得なくなり、その結果が自殺に結び付きそうになるから意識をマルに戻す。

「部長までマルなのかよ……」

ちなみに、マルは部長に敬語を使わない唯一の人間である。

尖がってるって凄いな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2389n/>

オカケン!!

2010年11月23日11時13分発行